

# ある小悪魔の話

nenecco

## 三次創作作品

## オリキャラ注意

※この作品には、ネットラジオ「ラジオグッド☆ナイト」に投稿された、  
東方Project原作には登場しないキャラクターが、登場しています。

【登場する原作外キャラクター】

### ◆フォルネ

第一回「僕の考えた○○」涼名さん投稿。大図書館の前管理者に仕えていた小悪魔。水にまつわる力を使う。他人に気づかれなくなる魔術を使っている。

### ◆望月やよい

第六回「僕の考えた○○」紅魔さん投稿。空間転移の力を使う死神。「死神は魂を救うのが仕事」という考えを持つ。

魔法図書館、古書区画。

パチュリーののために拡張された大図書館の、ずっと奥にある、拡張前から図書館だった場所。全体の一分にも満たない広さしかなく、今では、あまり人が立ち入らない空間となっている。

その古書区画に、人影がひとつ。

腰まで届く、深い蒼色の髪。落ちていた色合いの服装。右目には、丸い片眼鏡。頭の羽を見れば、彼女の種族が小悪魔だとわかる。しかし、いつもパチュリーの側にいる少女とは違う小悪魔だ。

その小悪魔、フォルネは、備え付けの小さなテーブルの横に屈み込んで、探し物をしていた。

「ここにもないなんて……おかしいですね。いったい、どこに置いたのでしょうか？」

見つからないのは日記帳。このテーブルの上に置いたところまでは覚えている。そこから後がわからない。

「書架に納めた、とは考え難いのですが……見ておきましょうか」  
身体を起こして、書架を見上げる。

ふと、目の端に違和感があった。

通路。空間の歪み。——転移の能力。

「……来館は、正しく入り口からにして欲しいものですね」  
思わすため息。そして姿勢を正すと、フォルネは歪む空間へ向き直った。

歪みから現れたのは、大きな鎌。黒い服。黒髪の少女。フォルネが知っている相手。死神の、望月やよい。

「久しぶりだな、フォルネ。すぐに見つかってよかった」

「お久しぶりです。——歓迎はいたしません」

「まあ、そう言うな。話があつて来たんだ。仕事じゃない」

「気軽な調子でいうやよいだが、目は刺すように鋭い。」

「その様子で、仕事じゃない、といつても、説得力ありませんよ」

「そうかもな」

「長くなりますか？」

「君しだい」

少し考える様子を見せて、フォルネは図書館の奥に体を向けた。

「お茶を、用意してきます。お掛けになっていてください」

「ああ」

やよいは手近な椅子に腰を下ろし、テーブルに大鎌を立てかける。

「さて、どこまで踏み込めるかね……」

テーブルの上に、ポットと二セットのカップが並んだ。それぞれのカップにハーブティをそそぐと、フォルネはやよいと向かい合う位置に腰を下ろす。

辺りに漂う香りは柔らかく、しかし、張り詰めた空気は刃物のように鋭く尖っていた。

「早速だが、フォルネ、君はいつまでここに居るつもりだ？」

「やよいは単刀直入に、本題を切り出す。」

「私の命が尽きるまで」

お茶を飲みながら言うフォルネの答えは、ためらいなく簡潔。

「それが命を縮めることになるとしても、か？」

「今度の返事は、無言。」

「魔界の者がこちらに居るには代償が必要なのだろう？ 力があ  
る者なら、魔族の力を自ら封じ、こちらの者として生きることでも  
できると聞く。だが、君たち小悪魔にはそれはできない。だから、契  
約が必要になる」

まるで問い詰めるかのような口調。

「君はマスターを失い、契約が切れた。こちらに居続けるとどうな  
るのか、分かっているのだろう？」

しかしフォルネは、まるで興味がないかのように、聞き流してい  
た。空になったカップに、二杯目のお茶を注ぐ。

「君は、人に気づかれなくなる『能力』があるというが、それは本  
当に君の力なのか？」

フォルネの手が止まる。

「君の存在が、消えかけているのではないのか？」

「そんなことは、ありません」

「咳くような声。」

「私の目には、君はもう、生者とも死者ともつかない。このまま魔  
界に帰らなければ、いずれ魂すらも消えるぞ」

「事実を告げる。」

少しの間、会話が途切れた。

やがて、冷めた表情で、フォルネが静かに口を開く。

「やよいさん、あなたが最初にここを訪れたのは、私のマスターさ  
まを連れ去るのが目的でした」

「人聞きが悪いな。死んでもなお留まる魂を迎えに来ただけだ」

「でも、あなたは、その目的を達成できなかった」

「ああ」

「その理由、考えたことがありますか？」

「理由？」

やよいは、怪訝な表情を浮かべる。

「治せぬ病に侵されていたマスターさまは、永遠の命を手に入れることを、お考えになりました。しかし、竹林の薬師が作るという秘薬を実現するには、時間が足りない。そこで私たちは、別の方法をとることにしました」

「永遠の命!?　なんて愚かな……。いや、しかし私が来たときには、あの者の魂は、すでにここにはいなかった」

「あなたが、気付かなかっただけです」

「そんなはずは無い！　私は死神だ、魂に気づかないなど——」

フォルネは、やよいの言葉を遮って、静かに立ち上がる。

「やよいさん。あなたの間違いを、ひとつ訂正します」

その様子は、この場所を誇るかのようで。

「私の愛しい魔法図書館は、ここにいます」

ずっと冷めた表情だったフォルネの顔に、微笑みが浮かんでいた。「発動した魔法によって、マスターさまはこの図書館と一体となりました。ならば、私がマスターさまと供にあり続けるのは、当然でしょう？　魔法の衝撃で、契約は切れてしまいましたが、それは問題ではありません」

それはひどく虚ろで、今にも壊れてしまいそうな、見る者を不安にさせる微笑み。

「君は、本当に、そう思っているのか？」

あるいは、すでに正気を失っているのか？

「お疑いですか？」

「この場所に魂が在るようには思えない」

「しかし、事実です。変わることはない、私の真実」

フォルネはそう言い切る。

固執する想いは怨霊になりやすい。やよいは死神として、そうなる前に手を打ちたかった。しかし、まだ死んでいない者に、強引なことはできない。

「改めて聞くが、魔界に帰る気はないのか？」

「ありません」

「君があつた世を希望するなら、案内するぞ」

「お断りします」

「ここまでか——」。

今、これ以上の時間をかけても、フォルネは応じそうにない。すでに、死者ではない者に関わりすぎている。彼女がこの場所に固執する理由が分かったことを収穫として、対策を考えて出直した方がいいのかもしれない。

そう結論付けると、やよいは大鎌を手に取り立ち上がった。

「帰るよ」

「そうですか」

「だが、また来よう」

「お待ちしていますよ。百年後でも、二百年後でも」

「いや……。もっと近いうちに来る」

そんなに長い時間は、おそらくフォルネが持たない。

「次に来たとき、君が怨霊になっていないことを願うよ」

そう残して、やよいは空間転移で姿を消した。

フォルネは、しばらくの間、やよいが消えた場所を見つめていた。誰かと一緒にお茶を飲んだのは、どれほど前のことだろうか。マスターさまはここにいる。

確かな存在を感じている。

でも、一緒にお茶を楽しめないことが、残念だった。

ティーセットを片付けて、フォルネがテーブルに戻ると、その間に来たのだろう。パチュリーが本を広げていた。彼女自身が、古書区画に来るのは珍しい。

テーブルには、数枚の紙と筆記具が置かれている。

そして、フォルネが探していた、日記帳。

フォルネに気付いて、パチュリーが本から顔を上げた。視線を日記帳に送る。

「それ、うちの子が間違えて持ってきたみたい。ごめんなさいね」

「……そうですか」

会話はそれだけ。お互い、積極的に話をする方ではない。

再び本に視線を戻したパチュリーは、しばらく読み進んだ後、傍らのペンを手にした。インク瓶を開ける。しかし、何かに気づいたように、その手を止めた。

「インクを間違えてしまったわ」

一度開いた瓶の蓋を閉める。

「茶黒、私は使わないのに。らしくない失敗ね。前館主が使っていた色を持ってくるなんて」

そしてそのインク瓶を、フォルネの前に置いた。

「……？」

「あなた、使うでしょう？」

「はい。使いますか……」

茶黒のインクは、確かにフォルネのマスターが使っていた色だ。フォルネも同じものをずっと使っている。

フォルネは、このインクをいつも無断で持ち出していた。インクがあるのは、備品棚の一番手前。すぐに取り出せる所に必ず二本。

——でも、現館主はこのインクを使わない？

「現館主。このインクは——」

「構わないわ。あなたの他に使う者はいないのだから」

それはつまり、フォルネのために用意していたということ。

「でも、勝手に持っていくのはやめなさい。在庫がわからなくなるわ。次からは注文書を出してちょうだい」

パチュリーは、横に置いていた紙をフォルネに渡す。

「いいのですか？」

今のフォルネは、図書館に勝手に住み着いているようなものだ。

契約はなく、仕事もあるわけではない。

「必要なものでしょう？」

「……はい」

「それじゃあ、今度からそれをお願いね」

そう言うと、パチュリーは本を閉じて立ち上がった。

「お戻りになるのですか？」

「インクがないもの。書齋に帰るわ。あの子も待っているし」

「そうですか……。……また、お越しく下さい」

「ええ。またね」

パチュリーは軽く手を振って、古書区画を後にした。

フォルネが、パチュリーから受け取った紙は二枚。

一枚はインクの注文書。

もう一枚は、フォルネに宛てたもの。

『注文書 古書区画管理選任小悪魔 一人』

表題こそ違うものの、内容は契約書そのものだった。

契約があれば、存在が消えることはない。ずっと古書区画にいることができる。そのためだけの契約。

「無関心なようで、あの方は意外と見ているのですね」

——マスターさま。

——あなたがパチュリー様を次の館主として認めた理由が、少し、  
わかった気がします。

そして、フォルネはペンを取り、その注文書に向かった。

